

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月1日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520507

研究課題名（和文） 言語の多様性に対する普遍文法理論の妥当性の検証

研究課題名（英文） On Verification of the Validity of the Theory of Universal Grammar for the Varieties of Languages

研究代表者

大庭 幸男（OBA YUKIO）

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：90108259

研究成果の概要（和文）：本研究では、普遍文法理論の妥当性を検証するために、さまざまな言語における「純粋のWH疑問文」「問い返しの疑問文」や「多重WH疑問文」について調査研究した。まず、本研究の基盤となる理論的な枠組みを吸収し、この枠組みで上記の疑問文の先行研究を検討した。次に、これらの疑問文に関して、タイプの異なる言語のデータを収集し、さらに、普遍文法理論でこれらのデータを説明するには、より細かなシステム（たとえば、複数のパラメーターなど）が必要であることを指摘した。

研究成果の概要（英文）：In this research, I studied on three types of questions such as normal questions, echo questions and multiple wh-questions in various languages in order to verify the validity of the Theory of Universal Grammar (TUG). Firstly, I absorbed the theoretical backgrounds, principles, rules and operations of the TUG, and then examined the previous analyses of these questions. Secondly, I made out the database of these questions in various languages which have been presented in papers and books concerning them. Furthermore, I pointed out that it is necessary to assume more detailed systems incorporating linguistic parameters, in order to account for the collected linguistic data within the framework of the TUG.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：普遍文法理論、WH疑問文、問い返しの疑問文、多重WH疑問文、局所性

1. 研究開始当初の背景

(1) 普遍文法理論研究における主要な目標の1つは、「人間の言語が本質的に普遍的な文法に基づいていること（文法の普遍性）」と「実際の言語が多様性に富んでいること（言語の多様性）」を統一的に説明すること

にある。そのために、この理論では、個別言語文法の中核をなすものとして普遍文法を想定し、その文法の中に「原理」と「パラメーター」を仮定するという「原理とパラメーターのアプローチ (Principles-and-Parameters Approach)」を取っている。普遍文法理論で

は、これまで「原理」と「パラメーター」の種類とその内容を特定し、「パラメーター」の値を決定することによって、言語の多様性を説明しようと試みてきた。この試みは一定の成果を上げてきたが、その成果は限定された言語データに基づくものである。したがって、さまざまな言語の詳細にわたる言語事実を調査・収集して、それによって得られる言語事実が、果たして上記の普遍文法理論モデルと最近のミニマリスト・プログラムによって適切に説明されるかどうかを検証することが緊急の課題として残っている。本研究はそのための検証作業を行うものである。

(2) Comorovski (1996), Ginsburg and Sag (2000), Boskovic (2002), Boeckx and Grohman (2003), Boeckx (2003)等の研究では、「純粹のWH疑問文 (Genuine WH-Question)」やこの種のWH疑問文に関連する構文 (例えば、「問い返しの疑問文 (Echo WH-Question)」と「多重WH疑問 (Multiple WH-Question)」) について議論され、これらの構文の類型とその統語的・音韻的特性等が個別的に分析されてきた。しかし、「純粹のWH-疑問文」と「問い返しの疑問文」と「多重WH疑問」を統一的に説明するような研究は行われていない。したがって、これらの分析の成果が言語の多様性を説明する普遍文法理論の中に組み込まれうるかどうかについて検討する必要がある。本研究は、このような先行研究の分析を検討し、分析方法や理論の統合を試み、普遍文法理論の発展に貢献しようとするものである。

## 2. 研究の目的

本研究では、言語の多様性について通言語的に調査・研究し、普遍文法理論が言語の多様性を適切に説明できるか否かを検証することを目的とする。特に、本研究では「純粹のWH-疑問文」「問い返しの疑問文」と「多重WH疑問」に焦点をあてて、普遍文法理論の妥当性を検証するものである。具体的な目的は以下の通りである。

(1) 普遍文法理論 (原理とパラメーターのアプローチやミニマリスト・プログラム) における「純粹のWH疑問文」「問い返しの疑問文」「多重WH疑問」の分析方法を正確に把握し、問題点を検討する。そのために、まず、普遍文法理論の提唱者であるマサチューセッツ工科大学教授のノーム・チョムスキー博士が書いた一連の論文や著書を読み、普遍文法理論の「原理とパラメーターのアプローチ」と「ミニマリスト・プログラム」を正確に理解・把握する。次に、この普遍文法理論において、上記のWH疑問文がどのように分析されているかについて考察し、その妥当性や問題点を検

討する。その上で、この理論がどのような概念的・経験的な問題点を孕んでいるかについて考察する。

(2) 「純粹のWH疑問文」については、言語の多様性に関わる言語事実を通言語的に調査し、WH句の移動が存在するかしないか、複数のWH句が移動できるかできないか、文末の疑問終助詞が存在するかしないか、などについて言語タイプごとに類型化する。

また、「問い返しの疑問文」や「多重WH疑問文」に関しても、さまざまな言語を調査・研究し、言語タイプごとに類型化を行う。

(3) 上記のWH疑問文を研究する上で重要だと思われる先行研究として、Comorovski (1996), Ginsburg and Sag (2000), Boskovic (2002), Boeckx and Grohman (2003), Boeckx (2003)等がある。そこで、これらの先行研究で提案されている理論や分析が、上記(2)で類型化された言語の多様性を適切に説明できるかどうか検討するとともに、どのような概念的な問題点を有しているかについても考察する。

(4) 最後に、普遍文法理論の「原理とパラメーターのアプローチ」と「ミニマリスト・プログラム」が言語の通言語的多様性をどのように、そして、どの程度まで説明するかを検討して、その問題点を把握・整理する。その後、先行研究で提案された理論や分析が普遍文法理論に如何に組み込まれるかについて考察し、より妥当性の高い理論の構築を試みる。

## 3. 研究の方法

(1) 普遍文法理論 (原理とパラメーターのアプローチ、ミニマリスト・プログラム) の提唱者であるマサチューセッツ工科大学教授のチョムスキー博士が発表している基本的な論文や著書 (以下にその一部を掲載する) を読み、この理論の枠組みを用いた本研究に関連するWH疑問文の分析方法を理解・吸収し、その妥当性や問題点を検討する。

・Chomsky, Noam (2004) "Beyond Explanatory Adequacy," *The Cartography of Syntactic Structures 3: Structures and Beyond*, ed. by A. Belletti, 104-131, Oxford University Press, Oxford.

・Chomsky, Noam (2007) "Approaching UG from Below," *Interfaces + Recursion = Language?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, ed. by U. Sauerland and H. Gartner, 1-29, Mouton de Gruyter, Berlin.

・Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by R. Freidin, C. Otero and

M. L. Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.

(2)「純粹のWH疑問文」「問い返しの疑問文」や「多重WH疑問文」に関して、さまざまな言語を調査・研究し、事例をデータベース化し、類型化を行う。収集するデータは英語だけではなく、フィンランド語やブルガリア語などのヨーロッパ諸語、中国語や韓国語などのアジア・アフリカ諸語のものである。また、データ収集の方法は、理論言語学関係の論文・著書から取り出すだけでなく、各種の言語コーパス、たとえば、英語ではBritish National CorpusやCorpus of Contemporary American Englishなども利用する。

(3) 普遍文法理論（原理とパラメーターのアプローチとミニマリスト・プログラム）の枠組みで、本研究の対象となる WH 疑問文を研究した文献を読み、分析方法や問題点等を整理・検討する。

(4) 普遍文法理論の「原理とパラメーターのアプローチ」と「ミニマリスト・プログラム」が上記(2)で収集された言語事実をどのように、そして、どの程度まで説明するかを検討して、その問題点を提示する。さらに、先行研究で提案された理論や分析が普遍文法理論に如何に組み込まれるかについて考察し、より妥当性の高い理論の構築を試みる。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究は、普遍文法理論の枠組みでさまざまな言語の「純粹のWH疑問文」「問い返しの疑問文」「多重WH疑問文」を対象とし、この理論がこの種のWH疑問文を適切に説明するかどうかを検証するものである。まず、普遍文法理論を理解するために、最重要だと思われる論文(Chomsky (2004, 2007, 2008))や著書(Chomsky (1995), (2000))などを読み、文法的な「素性」の種類・内容、変形操作としての「併合」「一致」、変形に関わる「フェイズ」という概念や「フェイズ不可侵制約」など、本研究の基盤となる原理・パラメーターや各種概念・制約等を吸収した。また、本研究に関わるWH疑問文の分析方法を把握し、この方法の妥当性についても検証した。その結果、フェイズに基づいた分析をさまざまなWH移動現象に適用したところ、適切に説明できないものがあることを論文で指摘した。

(2) このように理論的な基盤を固める一方で、「純粹のWH疑問文」「問い返しの疑問文」「多重WH疑問文」に関する言語データを収集し、類型化を行った。具体的には、WH句の移動が随意的になる英語タイプの言語、

WH句が移動しない日本語・韓国語タイプの言語、WH句が義務的に移動するスラブ語タイプの言語、その他の構文をとる中国語タイプの言語に類型化し、その特性を明らかにした。

本研究の目的は、上述したように、さまざまな言語のWH疑問文に照らして、最新の普遍文法理論(=生成文法理論)が妥当であるかどうかを検証することにある。したがって、本研究において、上記(1)の理論的な枠組みを理解することと、上記(2)の各種言語のデータ収集は車の両輪に等しく重要なことである。本研究において、この理論の最も重要な論文や著書を精読し、基本的な考え方、概念、制約や条件、分析方法等を正確に把握できた。また、言語データについても、まだ数には限りがあるものの、本研究にとって重要と思われる言語データを収集し、言語のタイプ別に類型化した。これらの成果は、本研究を今後も継続して行うにあたり、一つの基盤となるものであるため、その意味で本研究の成果はたいへん有意義なものである。

(3)「純粹のWH疑問文」「問い返しの疑問文」や「多重WH疑問文」に関して、さまざまな重要と考えられている数多くの先行研究の分析方法を整理し、問題点等を検討した。その成果は、下記(4)の論文・著書に示されている。なお、検討した先行研究の一部は、次に示す通りである。

・Bricmont, Jean and Julie Franck (2010) *Chomsky Notebook*, Columbia University Press, New York.

・Larson, Richard (2010) *Grammar as Science*, MIT Press, Cambridge, MA.

・Miyagawa, Shigeru (2010) *Why Agree? Why Move?*, MIT Press, Cambridge, MA.

・Gallego, Angel J. (2010) *Phase Theory*, MIT Press, Cambridge, MA.

・Boeckx, Cedric (2008) *Bare Syntax*, Oxford Univ. Press, Oxford.

・Grohmann, Kleanthes K. (2003) *Multiple Wh-Fronting*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

(4) 具体的な研究成果(論文・著書)として、『ことばとところの探求』に掲載された「二重目的語構文と多重wh疑問文」では、二重目的語構文におけるWH疑問文や多重WH疑問文などを取り上げ、間接目的語それ自体や、あるいは、その中の一部をWH句として取り出すことができない事実(具体的には、それぞれ、\*Who did you give t a book? / \*Who did you say Cindy sent [a friend of t] a picture? などの例)や、この構文に複数のWH句が生じた多重WH疑問文では、間接目的語それ自体や、あるいは、その一部を取り出すと文法性が異

なること(具体的には、それぞれ、Who did you give t which paycheck? / \*Who did you say Cindy sent [a friend of t] which picture?などの例)について議論した。その結果、二重目的語構文の間接目的語は取り出せないと先行研究で主張されているが、インフォーマント調査により、間接目的語は取り出せると判断する人がいることを指摘した。次に、同構文の間接目的語の一部は取り出せないで、島(island)を形成することを主張し、その証拠を示した。最後に、二重目的語構文の島の中にWH-in-situがあり、それ以外の主語等の位置にWH句が生じる多重WH疑問文は文法的であるので(具体的には、Who filed it [without reading which article]? / Who remembers [where we bought what]?などの例)、その派生方法をWH群仮説に基づいて説明した。このWH群仮説は、ドイツ語、ブルガリア語、英語、韓国語や日本語にも適用されるものである。

また、単著『英語構文を探求する』を出版して、本研究課題の成果の一部をその中で公表した。特に、本書では、中間構文、二重目的語構文、小節構文を取り扱い、これらの構文に観察されるWH移動現象や多重WH疑問文等を取り上げ、普遍文法理論の枠組みでこれらの構文の意味的・統語的特徴やこれらの構文の統語的な構造を明らかにした。たとえば、小節構文(この構文は、I consider him honest.のように、himとhonestが主語・述語関係を形成しているものを言う。)では、動詞によって小節の主語からの取出し可能性が異なること(具体的には、動詞がconsider, believeなどであればその取出しができない(\*Who do you consider [the sister of t] very smart? / \*Who do you consider [stories about t] dull?)が、動詞がseeやletなどである場合には取出しが可能であること(Which planet did you see [a picture of t] appear on your computer screen? / Who did you let [a rumor about t] spread around the entire department?)などについて考察し、普遍文法理論において理論的整合性のある説明を提案した。

また、結果構文(この構文は、動詞(自動詞および他動詞)の後に生じる(疑似)目的語が動詞の表す行為の影響を受けて、ある結果状態に至ることを表す文を言い、John broke the window to pieces. John ran his Nikes threadbare.のような文を指す。)では、結果構文におけるWH疑問文について議論し、動詞が他動詞であれ、自動詞(非能格動詞)であれ、間接疑問文からその構文の(疑似)目的語を取り出すことができることについて考察し、その理由を示した。議論した具体的な例は以下の通りである。結果構文の動詞が他動詞の場合の例：?Which metal do you wonder who hammered t flat? / ?Which metal

do you wonder whether to hammer t flat?そして、結果構文の動詞が自動詞の場合の例：?Which sneakers do you wonder who ran t threadbare? / ?Which sneakers do you wonder whether to run t threadbare?

さらに、論文集『待兼山論叢』45号に掲載された「英語の同族目的語構文の特異性について」では、同族目的語構文(この構文は、動詞が他動詞であれ、自動詞(非能格動詞)であれ、目的語として動詞と形態的に何らかの関連性を有するものを取った文を言い、John lived a happy life. John smiled a merry smile.のような文を指す。)において、同族目的語が真の目的語であることを示すために、同族目的語が間接疑問文から取出すことができること(?What kind of smile did Chris wonder [whether Lee smiled t]? / ?What kind of dance did Chris wonder [whether Lee danced t]?)を論じた。

本研究においては、当該研究の基盤をなす普遍文法理論の全体像を把握するとともに、さまざまな言語の「純粹のWH疑問文」「問い返し疑問文」「多重WH疑問文」に関するデータを収集し、類型化することができた。さらに、パラメターの一種と考えられるWH群についても考察することができた。

今後もこの研究を継続して推し進め、このような言語データを利用して、更なる研究成果を発表していきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 大庭幸男、英語の同族目的語構文の特異性について、(2011)、待兼山論叢、査読無、45巻、95-118

[図書] (計4件)

- ① 大庭幸男、英宝社、英語構文を探求する、(2011)、226

[その他] ホームページアドレス：

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/eigogaku/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大庭 幸男 (OBA YUKIO)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：90108259